医療法人惇慧会

外旭川病院だより

第18号
2025年7月

理　　念

人間を大切にする企業風土をつくり
人間を幸せにする企業を目指します

指　　針

1．何事にも積極的に挑戦します
2．創造力を働かせ、新しい価値を創っていきます
3．地域と共に生き、地域に貢献できることを
　喜びとします

基本方針

1．医療人としての自覚を持ち患者さんの命と
　尊厳を守ります
2．患者さんの人権とプライバシーを最大限に
　尊重します
3．地域社会の一員として地域の医療・福祉の
　充実に努めます
4．思いやりのある医療と快適な療養環境を
　目指します
5．自己研鑽に努め質の高い医療を提供します

院長挨拶
幸せな社会とは

外旭川病院 院長
船木　公行

また猛暑の夏がやってきました。水害にはもうこりごりですが、少しでも被害をくいとめられるよう、我々も普段からの心構え、準備が必要ですね。またコメや燃料費などの物価高騰で四苦八苦しておられる方も多いのではないでしょうか。こういう時こそ一般市民の生活や心の痛みを和らげるような政策を期待したいものです。

我々医療界では少子高齢化の社会の中、医師・看護師・介護士不足に加え、収入が診療報酬などの公定価格に縛られ、物価、人件費の伸びに支出が増え続け、どこの医療機関、施設も経営が苦しくなってきています。そのため、赤字が続く病院では病床削減どころか、閉院に追い込まれるところも増えてきています。医療機関や施設は病気を発見し、予防し、治し、良好な生活環境を提供するためにあるわけですが、それがどこも立ち行かなければ国民一人一人が幸せになれるはずがありません。

このように医療環境が激変する中、私たち外旭川病院、外旭川サテライトクリニック、及び関連する施設では、今まで以上に患者さんの健康のため、それぞれの方の心に寄り添い、時には人生最期の一時期にどのように我々がかかわれるか相談相手になっていかなければと思います。

海外では痛ましい戦争が続き、難民が増え続け、多くの方々が悲惨な状況に置かれています。また内外問わず、SNSではフェイクニュースが溢れ、社会不安をあおり、選挙結果や経済に悪影響を及ぼしています。ある時、「今の日本は世界からみれば、理想の、皆が未来に目指すべき世界一平和で幸せな社会だ」と外国人の若者がテレビで話していました。本当にそうでしょうか？もしそうでないならば、我々一人一人がそういう社会を目指して心の在り様を定めて行きたいものです。医療、福祉に関わる我々も、目の前のお一人お一人が幸せを感じられるように、また幸せな社会作りのために、仕事や社会活動を通じて貢献していきたいと思います。

Our Team 部署の紹介

身体的拘束最小化チーム

認知症看護認定看護師　石川　和子

身体的拘束最小化チームは令和６年発足し、患者さんの人権を保護し適正な医療を提供するため、身体拘束を最小化する取り組みを多職種チームで行い、身体拘束、そのほか患者様の行動を制限する行為を行わない医療、ケアの実施を目指し活動をしています。

入院中の患者さんの中には、周囲に注意を向けることが出来ずに、治療に必要なチューブ類を抜いたり、筋力が低下し立つことも出来ない状態にも関わらずベッドから降りようとしたり、危険を回避できない状況になることがあります。患者さんの安全のために身体拘束「一時的にミトン手袋を着ける・ベッドの柵を増やし行動を制限する」ことがあります。私たちのチームは入院中の患者さんが身体拘束を最小限にして安全に過ごすことが出来るように多職種で検討を行っています。

主なメンバーは、医師、看護師、薬剤師、作業療法士、事務で構成され、医師は病気の治療や評価を行い患者さんのQOLを改善できる対処方法を助言、指導を行っています。看護師は日々の患者さんの状況を観察し多職種と情報を共有し身体拘束の評価を行い、薬剤師は薬剤の効果や安全性に関する情報や副作用について情報を伝えています。作業療法士は動作能力の評価を行い、スタッフへ機能面からの専門的指導、情報提供を行い、事務は身体拘束最小化に向けた取り組み強化に関する情報収集し提示、記録しています。

患者さんが安全に穏やかに治療に専念できるように私たちは今後も活動を続けたいと思います。

NEWS & TOPICS

第８回ホスピス緩和ケア市民公開講座を開催しました

令和７年４月12日（土）、秋田市にぎわい交流館AU多目的ホールにて「第８回ホスピス緩和ケア市民公開講座」が開催され、約50名の方が来場されました。

前半は病棟スタッフによる寸劇が行われ、ホスピス外来の受診、入院初日、痛みの緩和、心のケア、家族支援という５つの場面を通して、実際の現場での関わりが紹介されました。医師、看護師、医療相談員、ボランティアコーディネーターといった職種がそれぞれの立場で演じ、参加者の皆様にも分かりやすく伝わる内容となっておりました。今回は、ビデオ上映による「ご家族の体験談」も紹介され、ご家族が抱える不安や葛藤に対し、病棟スタッフがどのように寄り添っているかが伝えられました。後半はホスピス長による「がん患者の身体と心のケア」と題した講演が行われ、身体症状や精神的支援、スピリチュアルペインへの対応など、多岐にわたる内容が丁寧に解説されました。

参加者からは、「家族にとっても、その人らしい最期を迎えることの大切さを実感した」といった感想のほか、寸劇がわかりやすかった、緩和ケアへの理解が深まったなど、多くの感想が寄せられました。

今後も、地域の皆さまにホスピスや緩和ケアについて理解を深めていただけるよう、いただいたご意見をもとに、よりよい講座の開催を目指してまいります。次回も多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

ひとりで悩まないで

訪問看護でできること

外旭川訪問看護ステーション
管理者　持田 恵

外旭川訪問看護ステーション管理者の持田と申します。今回少し「訪問看護」について紹介させていただきます。

訪問看護とは、ご自宅で療養されている方が住み慣れた地域やご自宅でその方らしい生活がおくれるように看護師やリハビリスタッフがご自宅へ訪問しケアを提供するサービスです。

当ステーションでは看護師6名、リハビリスタッフ3名、事務1名のスタッフで利用者様の主治医やケアマネージャーと連携しご自宅での生活をサポートしています。

皆様、ご自宅での生活で心配なことはないでしょうか。

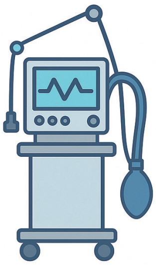
・ひとりでの入浴が不安になってきた
・便秘など排泄面で苦労している
・食事量が減った、むせることが増えてきた
・薬を飲み忘れてしまい、いつもたくさん残っている
・自宅で介護したいが不安がある

など日常生活での心配に、看護師による観察点で支援をいたします。

また、**胃ろうの管理や在宅酸素、傷の処置など、医療的なケア**が必要な場合も主治医の指示のもと訪問し処置いたします。住み慣れたご自宅で安全に過ごせるよう、**筋力維持や日常生活動作の練習のリハビリ**を行うこともできます。

私たちスタッフが、24時間365日の体制でお一人おひとりの希望に添って必要な看護サービスを提供して参ります。安心してご自宅での生活ができるようぜひ訪問看護をご活用ください。

訪問看護をご希望の方は、ご自身のケアマネジャーや地域包括支援センターにご相談ください。または、外旭川訪問看護ステーションへお気軽にお問い合わせください。



臨床工学技士が加わるということ

ー安全な医療体制構築に向けて

臨床工学科
臨床工学技士　佐々木 和義

今年度から外旭川病院に採用になりました、臨床工学技士の佐々木和義です。昨年まで、能代厚生医療センターに11年間勤めていました。

1987年に「臨床工学技士法」が制定され、臨床工学技士が誕生しました。臨床工学技士は、医師の指示のもと、生命維持管理装置の操作や保守点検を行います。多くの病院で、透析や手術室業務、カテーテル検査・治療、医療機器の保守管理など、様々な業務に携わっています。

現在の私の業務は、人工呼吸器やその他の医療機器の点検です。当院では、非常に多くの患者が呼吸器を装着しています。今まで臨床工学技士が在籍しておらず、院内のスタッフが一丸となって医療機器の安全使用に取り組んできました。そのチームに加わることに、非常に責任を感じています。患者、家族、スタッフが、安心、安全に医療機器を使用できるよう保守管理をしたいと思います。まだまだ未熟者ではありますが、精一杯努力してまいります。今後とも宜しくお願い致します。

食欲がないとき、どうしたら？

外旭川病院
ホスピス長　松尾 直樹

がんの患者さんによく見られる症状の一つに食欲不振があります。

食欲不振の原因は様々です。抗がん剤や放射線治療の影響のほか、便秘、痛み、味覚の変化、吐き気なども原因になります。さらに、がんが進行すると「悪液質（あくえきしつ）」という状態になり、がんそのものが体の代謝を変えてしまい、自然と食欲が落ちてしまうこともあります。

薬で食欲を改善できることもあり、条件が合えば、アナモレリンやステロイドなどを使うことがあります。味覚障害には亜鉛製剤が有効な場合もあります。

自宅で患者さんが食べられないと、ご家族も不安になるものです。なんとか栄養をとってほしいという気持ちから、無理にすすめたくなることもあるでしょう。しかし、そうした働きかけが患者さんにとってはストレスになることもあります。まずは好きなものを少しずつ、無理のない範囲ですすめてみましょう。最近の食事量をメモしておくと、診察時の参考にもなります。

どうしても食べられないときは点滴が必要になることもありますが、点滴には限界もあります。腕からの点滴（末梢輸液）は主に水分と塩分の補給で、栄養にはなりにくいのです。十分な栄養を入れるには、太い血管に管を入れる中心静脈栄養が必要になりますが、全ての方に適しているわけではありません。そのため、点滴を行うかどうかは、患者さんの状態やご希望をふまえて、慎重に判断することが大切です。

がんとともに過ごすなかで、「食べること」は体力のためだけでなく、心の支えでもあります。だからこそ、無理のない範囲で、少しでも楽に、楽しく食べられる工夫を大切にしていきたいものです。

新入職員紹介

嵯峨陽子（令和7年4月入職 看護師）

多様な業種で社会経験を積む中で、お金のためだけでなく、誰かの力になれる仕事がしたいと思うようになり、40歳で看護師免許を取得しました。新卒として働くこの歳での不安や焦りもありますが、優しい先輩方の丁寧なご指導に支えられ、今は一つひとつの業務に真摯に向き合い、学びを重ねる毎日です。まだまだ一人前には程遠いですが、患者さんとご家族が安心して過ごせるケアができるよう、これからも頑張っていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

佐々木美由紀（令和7年4月入職 介護福祉士）

今年４月から２病棟で勤務している佐々木です。以前は急性期の病院で勤務し、療養病棟勤務は初めてです。入職して２か月がたちますが、初めての経験ばかりで日々勉強の毎日です。

気管切開の患者さんの入浴介助は経験したことがなかったために不馴れで不安でしたが、先輩方から丁寧な指導、声をかけて頂きとても心強く感じております。

患者さんが安心して過ごせるように寄り添った介護を目指し、感謝の気持ちを忘れずに日々成長していきたいと思います。

医療法人 惇慧会
外旭川病院
〒010-0802 秋田市外旭川字三後田 142
TEL 018-868-5511　FAX 018-868-5577
https://jkk-sotohp.or.jp/sotohp/

■ 病床数 241床（療養病棟 207床、緩和ケア病棟 34床）
■ 診療科目 /内科、皮膚科、リハビリテーション科

Japan Council for Quality Health Care
日本医療機能評価機構
認定第 LL54 号